

Title	透谷文学形成期の問題(三) : 書簡類の検討(前編)
Author(s)	黒木, 章
Citation	聖学院大学論叢, 3 : 23-39, 201
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=785
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

透谷文学形成期の問題 (三)

—書簡類の検討(前編)—

黒木 章

はじめに

一八八五年夏に書かれた草稿「富士山遊びの記憶」¹以後、石坂美那との恋愛感情が昂揚した一八八七年八月までの間、我々は透谷が残した文献資料を見ることができない。この文献資料の空白は単に散逸を意味するのではなく「富士山遊びの記憶」を書く中で透谷が言葉或は「書く行為」の仕掛ける罫に陥いることを恐れた結果、彼はこの間何も書くことができなかったのだとわたくしは考えている。¹というのも透谷は「富士山遊びの記憶」を書いた直後の一八八五年九月に東京専門学校英語科に再入学して「希くはヒューブ(注 ユーゴの誤記か)其人の如く政治上の運動を織々たる筆の力を以て支配」することを願っていたにも拘らず、この間の文献資料が空白になったのは彼の「書く行為」に関わる問題であり、政治小説観に揺れが生じたためである²と考えるからである。

ところが美那との恋愛において突然数多くの書簡類(投函されたも

のよりも草稿や文学形象をめざした断片などの方が多いう意味で一括して「書簡類」というのだが)が出現する。極めて緊張した内容と透谷の文体の萌芽を含むこれらの書簡類の出現とその直前の空白とは誠に鮮やかな対照を見せている。

殆んどの書簡類が透谷の自己別決であることも特徴的である。このような文体的特徴と鋭い自己別決とは透谷の精神のありようと無関係であるはずはない。

思想というものを人がその実存の暗部或は深淵部分に錘鉛をおろしつつ自己別決に戦くことを以てその初発をみるならば、これらの書簡類はまさに透谷のそのような営みを示しており、従って透谷の実存を賭した闘いを示しているといわなければならない。

小論はこれらの書簡類を手掛りに再度透谷文学形成期の問題を考察せんとするものであり、³その前編である。

*

書簡類の分析と考察にかかる前に若干の確認をしておきたい。

大阪事件に絡んで自由民権運動から離脱した透谷は政治小説家たら

んとして東京専門学校英語科に再入学したのだが、具体的に何かを書いていたとは思えない。〈書く行為〉の仕掛ける罫に直面したことが最大の理由と考えられるが、その政治小説の揺れが大きな理由であったとも考えられる。というのも入学後彼は「同攻会」に所属してその機関誌『中央學術雑誌』を講読した節があるが、ここには丁度坪内逍遙の『小説神髓』がほぼ完成期を迎えそのいくつかの部分が断続的に掲載されていたし、半峰の「当世書生氣質の批評」(第二二、二二、二三号、一八八六年一―二月)や「佳人之奇遇批評」(第二五、二七号、一八八六年三、四月)などが日本近代文学批評論の嚆矢として掲載されていた。或は二葉亭四迷の「小説総論」(第二六号、一八八六年四月)が典型的に示すように『中央學術雑誌』はまさに日本近代文学の創世に関わる諸論を提示していたのである。加えて東京専門学校では逍遙は「主持ち」の政治小説を否定して本格的にシエークスピア論を講じていたし、テーヌの「英文学史」も教材に使われていたのだから透谷の政治小説観も激しく揺さぶられざるをえなかったと推測できるのである。

透谷は現実生活でも看過できない窮乏の状況にあった。というのも透谷の父快蔵が大蔵省記録局四等属の官職を前年一月に非職となり家計を補うために母ユキが弥左衛門町の家の一部を改造して煙草店を開くという状況であったから、当時一八才の透谷は家計を支える役割を果たすことが要請されていたのである。四等属の俸給は四〇円であったが、一八八四年一月の「太政官達第三号」のうち「官吏非職条例」が

適用されたと思われるから、快蔵の収入は一五円足らずになったわけで生活に窮したろうことは容易に推測できる(非職は所謂免職ではない。その期間中現俸の三分の一は支給されることになるが、いつ復職できるかよりいつ免職になるかの不安の方が遙かに大きくまた現実的不安であったろう。因みに快蔵は五年間の非職期間の後一八九一年に司法省の判任官四等級下級俸の水戸裁判所書記に任ぜられたがその俸給は三〇円であった⁽⁴⁾)。

このような状態だから一八八七年八月ごろの透谷は小説家になるための勉強どころではなかったであろう。彼がいつまで東京専門学校に在籍したかも定かでない。

一方石坂美那の一八八七年八月ごろの状況を確認してみる。彼女はこの年の七月一四日に横浜共立女学校和漢科を卒業し、父昌孝の民権運動の東京での拠点となっていた本郷竜岡町の別宅慶令居で暮らしていた⁽⁵⁾。因みに美那は一八六五年一〇月一八日生れ、透谷より二歳四ヶ月年長。八六年一―一月一四日横浜海岸教会で牧師稲垣信により受洗。

神奈川自由民権運動の重鎮である父昌孝(四六歳)や透谷の親友であった弟公歴(一八歳。但し民権運動の行き詰まりや大学予備門受験の失敗などが原因とみられるが、前年一二月から米国オークランドに渡つて数人の同志と非合法政治活動を組織し特に後に触れる新聞「新日本」の発行準備をしつつあった)、或は父昌孝と特に交渉のあった神奈川県令中島信行の妻湘煙(早くから民権運動家として有名で八二年の大坂演説会、八三年の「婚姻之不完全」の演説で投獄されたことな

どで知られているが、中島との法外の結婚や夫婦一緒にキリスト教の受洗をするなどとかく話題の多い女性であった）などに影響されたのであろうか、卒業式で「自由を張るに女子も亦責任あり」と演説を試みる女性であった。⁽⁶⁾このころ既に平野友輔（三〇歳。八三年東京大学医学部別科卒業。早くから民権運動の指導的役割を果しており昌孝に最も信頼される人物の一人だったといわれる。八四年八王子でキリスト教に入信。⁽⁷⁾八六年七月には八王子で内外科眼科の医院を開いていたことは確実だが、⁽⁸⁾八七年二月には藤沢に移転していたと思われる⁽⁹⁾）という許婚者がいた。

美那の暮らしていた慶令居に透谷が訪ねてきて、連日話し込んだことで二人の恋愛感情が急激に昂揚したと思われる。

書簡類から確認できる二人の接触ぶりを見てみよう。

一八八七年八月一六日慶令居を透谷が訪ね、二人は夜中過ぎ二時ごろまで話す。翌一七日昼前に起きて再び夕方まで話して透谷は帰る。

一八日透谷は長い美那宛書簡草稿を書く。一九日夕方透谷は慶令居を訪ねる。丁度教会に出掛けて留守をしていた美那の帰りを待つて話し始め、それが二〇日明け方近くまで続く。二〇日は午前一〇時ごろ起き、さらに午後四時ごろまで話して透谷が帰る。この日何時ごろか確定できないが、美那の母ヤマ（三六才）にかなりの苦言を呈せられている。透谷は帰る前に美那と翌二一日木挽町の厚生館で開かれることになっている「ワールレンス氏の演説会」に一緒に行く約束をする。二一日透谷は演説会に行く。しかし「其場所に美那嬢を見ん事を恐れ」

「演説會の終るや否や」「走つて家に帰」る。

以上が書簡類によつて確認できる二人の接触ぶりである。

二人はこれほど熱心に何を話したのだろうか。

このころの新聞は連日「大阪事件公判記事」を載せていたのだから、透谷が運動から離脱していたとはいいながら二人にとつて旧知の被告人たちの陳述や弁護人或は検察のやりとりをめぐつて話したのかも知れない。或は被告人たちの差入れや弁護人費用を調達するために奔走している昌孝のようすを話したのかも知れない。或はオーランドに渡つた公歴のことや彼が購読し慶令居にもいくらか残していたらうと思われる『基督新聞』や『六合雜誌』が話題になったかも知れない。或は美那が購読していた『女学雜誌』はほぼ話題にしたようである。ところが書簡類に見る限り二人は大阪事件を深く話題にすることは寧ろ避けた節がある。

恋愛感情如何について確認してみる。

一六日から一七日にかけては特別のことはなかったようであるが、変化がみられるのは一九日夕方から二〇日の明け方までの場面である。即ち一八日の長い美那宛書簡草稿を美那と別れて「遠く去らん」とするに際して書くのだといっているけれども、透谷はこれを書きながら自己の胸奥に美那恋慕の感情が湧き上がりつつあることを自覚している。この段階ではそれを秘めようとはしている。透谷がこれを投函したとは思えない。少くとも一九日夕方透谷が慶令居を訪ねて美那と話し込む場面でも美那がこれを読んでいた形跡はない。

一九日夕方から二〇日明け方までの場面で二人は「ラブ」を話題にする。即ち美那が「日本の婦人がラブの仕方」を知らないと話すのに對して、透谷は「余は決してラブと云う事を知らず又たラブの爲めに苦しむ事なからん」と嬢の前では口を拭へり(注 引用部分の傍線は論者が付した。以下同じ)という具合だ。この傍線部分の表現は、一八日に美那宛書簡草稿を書きながら自己の胸奥に美那恋慕の感情が湧き上がるのを自覚しながら秘かにそれを抑封しようとしていた透谷の強がりがみられるようである。また嘗て民権運動の壮士として八王子の遊廓に出入りしたという透谷の自由平等を旗印に掲げながらそれと相容れない振舞いをしたことの苦い反省が窺えるようでもある。或は美那の許婚者平野を思い、また生活に窮している現在の自分を思うといった透谷の微妙な心理を読み取ることも可能であろう。

美那は「貴君の顔色痛く衰へたり、果して如何なる不幸ありてか君を苦しむる」と案じるが、続いて『大坂新聞』の「歐州情譜と云ふ續き者」を「低き音楽の連續」のような声で読み聞かせる。

後に透谷はこの場面を「此夜は最も生を苦しめたる記憶す可き時なりけり、生は既に貴嬢の生をラブする事を覺りしも、此夜ほど貴嬢の舉動の余を引くこと甚しきはなかりし」「貴嬢が生をラブする舉動ある毎に、最も感覺の鋭き生の胸部にハツシと立つ矢の痛みはいと堪へ難く七轉八倒の苦しみなりし」(一八八七・九・三 美那宛書簡)と書いている。

それにしても連日連夜これほどの熱心さで話し込む若い男女の姿は

異常である。慶令居を守り、美那と妹登志子を監督すべき母ヤマから見ると、透谷が夫昌孝を敬慕する民権運動の壮士であり、就中公歴と同年の無二の親友として幾度も寝泊りした人物であるとしても、許婚者平野への配慮もあつて苦言を呈せざるをえなかつただろう。果してヤマは二〇日に透谷に「難題を云ひ掛け」、美那に對しても(二〇日であつたか否かは確定できないが)「彼は一儒生なり一貧人なり」「彼には老母あり老父あり、彼は美ならぬ家に住めり」と相当露骨に注意を与えたようである。

ヤマをしてこのような苦言を呈せざるをえなくさせたについては二人の異常な接触ぶりがあり、平野に對する配慮があつたからだが、もう少し立ち入つて当時の石坂昌孝の家の状態を確認することでヤマの心情を推測する必要があるだろう。

迂遠を承知で確認してみる。

石坂昌孝は確かに野津田の大地主であり、神奈川県自由民権運動の中心的存在ではあつた。彼は一八四一年四月二〇日に石坂吉恩の三男として生れたが、地親類である石坂昌吉の養子となり、五七年に昌吉が死去したのに伴つて野津田の名主及び小野路寄場の総代の地位を継いだ。六八年の一村名主制の施行で筆頭年寄、七一年には八区戸長、七三年の区画改正で現在の町田・稲城・多摩・日野の各市にまたがる神奈川県第八区の区長になっている。この間小野郷学の設立やそれを継ぐ民権運動の地方政社「融貫社」の創設に尽力するなど三多摩地域の豪農民権家として指導的役割を担つてきていたのだが、陸奥宗光・

大江卓に続いて県令となった中島信行の政治改革の中で七四年に県属に抜擢されるに及んでその地位は揺るぎないものとなった。七四年は板垣退助らが民撰議員設立の建議書を提出したことで知られるが、政府が時期尚早としてこれを退けたのに対して中島は強く公選民会を主張していた。中島は神奈川県独自の議会制度を整えていく。それが七五年の各区区長会議であり、県議会創設のための七六年の「県会議事章程」の作成である。昌孝の民権政治家としての指導的地位もこの流れの中で確立されたのである。昌孝は七九年の神奈川県選挙で八区から立候補して当選し初代議長に就任する（因みに九〇年の第一回帝國議会選挙では神奈川県第四区から出た中島らとともに昌孝は八区から出て当選している。また九六年八月には板垣らの推薦で僅か八ヶ月の期間ではあるが群馬県知事になっている）。

しかし昌孝の政治活動の裏で石坂家の資産は激減する。例えば七三年六月の「家属年令取調書」には「農 石坂公歴五才五月 父石坂昌孝三才二月 母弥眞二才一月 祖母葉与四九才七月 姉美奈子七才一月 妹登志三才」とあり、付籍に「富田知美（注 元旗本）の家族三名 塾寄留二名 僕婢五名」とあって総勢一六名の大家族であった。無論昌孝のもとには民権運動家たちが出入りしていたのであり、また田畑の殆んどを小作に出しているのだから寄留や僕婢の類が実際はもっと多かつたはずである。その出費は大きかつたらう。さらに例えば七七年一月の調書では石坂の資産は田七町五反余、畑九町八反余、山九町余で宅地萱野など合計すると二七町七反余である（野津田全村

の面積は一四九町余であるから村の約五分の一を所有していたことになる）。七八年一月の調書ではその評価額が五三一六円余で地租額が一三三円九〇銭である。

ところが八五年調書では評価額一五七〇円となっていてその資産が激減していたことがわかる。⁽¹²⁾ 加えて八七年ごろの昌孝は先の困民党救済のための肩代り借金を一〇〇〇円以上かかえていた⁽¹³⁾ のだから殆んど資産はないといってもよいほどだ。

昌孝が党中央常議員（八三年）、同党幹事（八四年）となって政治活動に奔走すればするほど資産はなくなったのである。加えて八六年一二月には嫡子公歴もオークランドに渡っていた。短期間で殆んどの資産を失いながら八七年八月ごろの昌孝は困民党の肩代り借金に加えて大阪事件の被告人たちへの支援金を集めるのに相当苦しむ状態であった。嘗ての大地主石坂家の面目を守らなければならないヤマの現実的不安は察するに余りあるものがある。

ヤマが透谷と美那とに苦言を呈するにはこのような背景があった。透谷が石坂の家の資産激減を知っていたか否かはわからない。しかしヤマが秘かに調べたという透谷の家は既に確認したように父快藏が非職の身であり、母ユキが細々と煙草店を開いて糊口を塗す状態であった（透谷が一八八八年三月二三日の石坂昌孝宛書簡の末尾で「北村と名のるもおかし たびこやの小僧 拜識」と書いて翰晦を見せるのもこの事情による）。勿論このころ透谷が「事業」を試みたことも事実だが、彼は悉く失敗し自ら「大敗の餘成す所なき一糟粕のみ」とい

わざるをえない状況であったからこそ、二〇日のヤマの「難題」は透谷に特別の重さを持ってきかれたと思われるのである。

小論で扱う書簡類の多くはこのような状況で書かれた。例えば一八八日の美那宛書簡草稿でも（早く平岡敏夫氏が指摘したように「昆太利物語」に影響された）自己劇化・物語化がみられ、⁽¹⁴⁾過度の修辞もみられて事柄が錯層してはいる。しかしその実存の暗部或は深淵部分に錘鉛をおろしながら鋭く自己を剔抉する透谷の姿がこれらの書簡類に現われていることは注目しなければならない。

*

小論で扱う書簡類に便宜的に符号をつける。

- (A) 美那宛書簡草稿 一八八七・八・一八
- (B) 《北村門太郎の》一生中最も惨憺たる一週間 一八八七・八・下旬
- (C) 快蔵宛書簡草稿 一八八七・九・四
- (D) 美那宛書簡 一八八七・九・四
- (E) 悲苦の《一日半》世紀 一八八七・一二・一四
- (F) 美那宛書簡草稿 一八八七・一二・一六
- (G) 絶情 一八八八・一・二一
- (H) 在米石坂公歴宛書簡草稿 一八八八・三・二三
- (I) 美那宛書簡 一八八八・三・二三
- (J) 嗟世に絶情ヨリ 一八八八・三・二三
- (K) 石坂昌孝宛書簡 一八八八・三・二三

以上である。

次に書簡類で強調される問題点を明確にするためにその内容を整理して符号をつけてみる。無論これらも便宜的なものだが、書簡類を書かれた時間の軸に沿って(A)~(K)のように並べてみるとその内容が大体次のような形で移行していると考える大雑把な捉え方によっていることも断っておかなければなるまい。

- (イ) 自己否定及び神の問題
- (ロ) 美那讚美及び恋愛観の問題
- (ハ) 自己肯定の問題
- (ニ) 人間或は社会の一般的認識の問題
- (ホ) 壮士批判の問題

以上である。

小論は紙数の都合で全体を二部に分け、ここではその前半部分(イ)(ロ)について考察することにする。

*

(イ) 自己否定及び神の問題

(A)は「今や貴嬢に別れて遠く去らんとするに際し聊か貴嬢に懇願する所あり、其は他ならず生のミザリイを聞いてたもと云ふ一事是なり」と書き始められるのだから全体が自己否定の形にならざるをえない。実際は屈折して美那への恋慕の感情を訴えているという奇妙なものになっているものである。

大きく三段階に分けられる。即ち(1)「英雄豪傑の氣風を欽慕」する「アンビションの病」が「身を誤れり」とする部分。(2)「国内政治思

想の最も燃え盛りたる時」「政治家」となる目的で運動を試みたことが「身を誤るの基」であったこと、次に「名利を貪らんとするの念慮」を捨てて「大政治家となりて己れの身を苦しめ萬民の爲めに」「身を宗教上のキリストの如くに政治上に盡力」するとともに「歐洲に流行する優勝劣敗の新哲派を破砕」する「大哲學者」を志したこと「嗚呼何者の狂痴ぞ斯かる妄想を斯かる長き月日の間包有する者あらんや」という部分。(3)明治一八年の「失望落膽」の後「從來の妄想の非なるを悟り爰に小説家たらん」と志すに至ったのだが、いまや「既に自ら生活を營む可き身」であることを考えるとこれも「一種の病氣なるべし」、よって「須らく繁忙なる事業に従う」のがよいのだと「斷然志を決して神戸地方に遊ばんとする所以」を述べる部分である。

既に書き始めるときに実は胸奥に湧き上がる美那恋慕の感情を秘め、読み手にそれを感得させる書き方なのだが、透谷は比較的冷静に過去を振り返りながら自己分析をしているといえる。

しかしここでの透谷はその実存の暗部或は深淵部分を直視していないように思える。なぜなら例えば美那もかなり細かく知っているはずの大阪事件に絡む民権運動離脱の問題に殆んど踏み込みをみせず、また父快藏の非職に伴う彼自身の窮乏生活或は政治小説觀の揺れについては寧ろ隠蔽していると思われるのである。「英雄豪傑」「大政治家」「大哲學者」などの言葉を使って時間を追って心境が変化したことを書いていながら、なぜそうなったのかについての思想的闘いを窺わせ

る書き方にはなっていない。つまり「英雄豪傑」「大政治家」「大哲學者」などの言葉が平板に並べられてしまつて、それらに衝突と緊張がない。言葉の衝突がないということは彼に実存を賭しての緊張した闘いが無いということではなければならない。例えば「名利を貪らんとするの念慮」を捨てて「大政治家となりて己れの身を苦しめ萬民の爲めに」「身を宗教上のキリストの如くに政治上に盡力」するという表現なども殆んど美那にとっては常套的表現にすぎなかつたろうと思われる。このような透谷のありようを例えば困民党事件では同じ豪農でも貧民から収奪するだけでなく、自ら貧民の肩替り借金を引き受けることで己れの莫大な資産をも収奪する豪農たちと闘わなければならない苦しい中でいまや大阪事件の被告人たちの支援金調達のために奔走しなければならぬ昌孝の民権運動家としての闘いと比較してみれば、透谷の言葉はいかにも観念的だといわなければならない。⁽¹⁵⁾「宗教上のキリストの如くに政治上に盡力」という表現も未だ「名利」や「功名心」と結びついたものでしかないことは明らかである。

透谷がその実存を賭しての思想的闘いと自己別決をみせるのは(B)以下の書簡類である。

(B)では「余は明治二十年八月廿一日迄は不信心者の一人」であり、「社界を罵つて止まざる者」「徳法道義を輕蔑して足下に踏み付け居たる者」「實に數多の婦人を苦しめて自ら以て快しとしたる者」というようにかなり具体的な問題を挙げている。しかも「眞神の庭に生長する葡萄の美果」たる美那が透谷を「ラブする」ことに気づいて自分も

「恐るべきラブの餓鬼道に陥」っていることを一面で喜びながらも「凡夫の一疾病者」「敗餘の一兵卒」たる自分は「此ラブは既に断念す可き者」「余は漂零して骨を青山に暴らす可し、余は断然身を下等社会の巢中に隠くす可し」なぜなら「今日余は余をして断行せしむ可き好機會を得たり、他ならず、嬢の老母が余に對して、難題を云ひ掛けたる事是なり」と具体的に自己否定の契機を書く。(C)の骨格は(B)と同じだが、大きくみると二つの特徴がある。一つは(B)を承けて一層踏み込んだものになりその自己剔抉が透谷の人格的問題としてなされていることであり、一つは「神」特に「神に感謝し神に歸依す可きを發悟」したということである。

父快蔵宛に書かれたためか透谷は構えることなく「生の一身は名譽と功業を成さんと思ふ心に固まりたり、此心を外にせば生の魂は無一物なり生の脳髓は死物にひとし、發狂するか白痴になるかの二にあらざるよりは此心に離れて安穩なる生活を過ごす事を得ざるべし」と書いて、しかしこのような自分が「神の信す可きを知らざりし事」「人の愛を買ふの道を知らざりし事」の二種の原因で「破滅」していたのだと書く。それを「不安心」「功名心」など一〇条に整理して剔抉する。加えて「事業」に失敗した自分は「始めより敗軍の將なる事を承知し居りければ、是より世を輝かさんとする此一少女を誤まらせんとは決して思」わないこと、「眞の神の教を以て衆生を救はんとする有要の一貴女」をして「其目的を達せしむるには生と結婚なぞと忌はしき志望を脱却せしむ可し、是れ生が断然此交際を破らんと計りし所以

なり、此戀情は即ち石坂嬢が世を益せんが爲めの犠牲なり」と書いている。ここでは非職中の父を気づかつてであろうか(B)にあった「嬢の老母が余に對して、難題を云ひ掛けたる事」が巧みに隠されて「石坂の老母は生と嬢との交際を絶たしめんと欲する様にも見えたり」と婉曲に書かれているが、「眞の神の教を以て衆生を救はんとする」美那の「其目的を達せしむる」ために「犠牲」になるのだと美那に重きを置いて恋愛の断念を納得しようとする透谷のありようが注目されるのである。

二つの特徴は恋愛の断念によって「驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し神に歸依す可きを發悟せり」という点である。この回心は透谷が論理的に説明できるものではないゆえに「驚く可き洪水の如き勢力を以て」と比喩的に表現するしかないのだが、これを(A)の「身を宗教上のキリストの如くに政治上に盡力せん」という(多分に美那への媚も含まれていたろうが)「功名心」と結びついた「キリストの如く」と比較すると明らかな違いがある。キリスト教とは無縁に生きてきた父快蔵に對して、また「實に生は大敗の餘成す所なき一糟粕のみ」とその具体的様相を知っているのだから父なら理解してくれると推測できる徹底的なその敗北意識に絡めて「イザ我れ眞の神の臣下となり神に忠義を盡す可し」と書いていることは注目してよいだろう(無論「神の臣下」「忠義を盡す」という表現に儒教的な伝統的倫理の残滓があることは指摘されようが、今は重視しなくてもよい)。

この回心はどうして起きたのか。

わたくしは美那との恋愛の断念を決意する契機になった八月二〇日のヤマの苦言、透谷が(B)で書いた「嬢の老母が余に對して、難題を云ひ掛けた事はなり」(具体的には(G)の「彼は一儒生なり一貧人なり」)「彼には老母あり老父あり、彼は美ならぬ家に住めり」という美那への非難であるはずだが、がが大きな意味を持つと考えている。なぜなら自己別袂をみせる(B)(C)(F)(G)(I)などで透谷は常に「大敗の餘成す所なき一糟粕」という自己規定と回心とを結びつけて書いているからである。ここには単に透谷文体の特徴である対句・重畳表現としてそれを指摘するに留まらない問題がある。例えば(B)で対句・重畳表現を拾えば「凡夫の一疾病者」と「眞神の庭に生長する葡萄の美果」、「敗餘の一兵卒」と「榮譽ある一婦人」、「漂零して骨を暴らし身を下等社會の巢中に隠くす」と「愉快なるラブを受けてラウスの花を挿す」などであり、(C)では「敗軍の將」と「教育も高く智識も持し加之其父より受けたる榮譽」、「大敗の餘成す所なき一糟粕」と「眞の神の教を以て衆生を救はんとする有要の一貴女」などであるが、これらの対句・重畳表現で使われる言葉は明瞭に鋭い対峙を見せて緊張を生むものになっている(これを例えば(A)の「英雄豪傑」「大政治家」「大哲學者」「小説家」など一種の対句・重畳表現とみられる言葉の使い方と比べてみれば納得されるはずである)。つまりこれらの対句・重畳表現にみられる用語の対峙とそこに生じる緊張は透谷における思想の闘いを意味するのである。

ともあれ一九日の夕方から二〇日の明け方までの接触の中で美那が

「ラブする舉動」を見せ、透谷もまた「貴嬢が生をラブする舉動ある毎に、最も感覺の鋭き生の胸部にハツシと立つ矢の痛みはいと堪へ難く七轉八倒の苦しみ」を抱えているようすに不安を感じたヤマが透谷に「難題」を呈し、美那をも非難した(ヤマは急いで昌孝に知らせ昌孝も二人の恋愛の進行を妨げようとしたらしいことは(G)で窺える)ことが透谷に美那への「絶情」を決意させ、それをうけて「驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し神に歸依す可きを發悟せり」「此に至りて總べて己れの全心を擧げて上帝の命に従はん」と書いている以上は透谷の回心にヤマの「難題」が重大な契機になったとみることは否定しようがない。

透谷の自己否定はこの回心によって、美那への恋慕の感情と「大敗の餘成す所なき一糟粕」という次元を超えてその自己否定に新たな展開をみせる。例えば(I)で透谷は次のように書く。即ち「余は自ら我が眼力の足らざるを知る、我が眼力は以て世界を見るに足らず、余が理想力は以て天下の事を量るに堪へざるを知る」「計らざりき、余の傲慢なる見解の誤まれるを、教示するものあり、其を何物ぞと尋ねれば、今我が身を捧げし神の教なり、基督教の勢力なり」「余は先きに天下の事成す可からずと思ひしは、人の力にて成す能はざるを悟りしなり、然れども、此に至りて始めて神の力を借つて成さんとするの、新しき望を起さしめたり、從令^{基督}斬の石なりとも神は自然の形状を與へたまへり」「嗚々たるアンゼルの數語は全く余の頑心を解放したり、悉く驕傲の念を脱却せしめたり、茲に至つて世に盡くし民に致さんとする

の誠情は悖然として旧に歸れり、己れの権力を弄ばんとするの義侠心にあらずして眞理の兵卒たらんと望むの愛國心なり、我が技量を試みんとするにはあらずして、神の眞意を世に行はんと欲するの至情なり、天下を以て功名を戦はずの廣野となさんとするにはあらずして、邦國を以て、神の聖徳を頌たんと思ふの微意」と。長い引用になつたが、透谷の自己否定の様相はこれまでとは違つた。「余の眼力」「余の理想力」「余の傲慢なる見解」といつているが、この「眼力」「理想力」は美那との直接的関わりを越えて「世界」「天下の事」である。「世に盡くし民に致さんとするの誠情」の回復も「権力」「義侠心」「功名」を離れて「眞理」「神の眞意」「神の聖徳」に発することをいう。ここには(A)の「アンビション」や(C)の「名譽と功業を成さんと思ふ心」「此心を外にせば生の魂は無一物なり」から離れた自由と広がり及び普遍性がある。このような見方が好意的過ぎるといえないのは、「神」と直面することによって透谷は「大敗の餘成す所なき一糟粕」という自己否定を超えて「新しき望」を起させたのが「人の力」でなく「神の力」であること、しかもそれを使役法の表現を用いているからである。それによつて「大敗の餘成す所なき一糟粕」の意識を越えて神による自己肯定によつて自らを「轟斬の石」「自然の形状」として把えなおしているからである。

このようにみてくると透谷の自己否定は透谷独特の内容があるといわなければならない。それは先ず美那との恋愛においてヤマが提示した「難題」によつて鋭く突きつけられた「大敗の餘成す所なき一糟

粕」という表現にみられる自己否定であり、次に恋愛の断念において直面した「神」による自己否定ということである。

わたくしは透谷の自己否定のうち前者を「水平志向」によるもの、後者を「垂直志向」によるものと考えている。

繰り返して述べてきたように「名譽と功業を成さんと思ふ心」に支配されながら父快藏の非職に伴つて「事業」を試みて「大敗の餘成す所なき一糟粕」という状況で透谷が美那への恋慕の感情を抑封しかねて苦悩する場面でヤマの「難題」は提示され、それを契機に「絶情」を決意したときの「神」との直面が透谷の自己否定を展開させたのである。仮に透谷が「商業」の「大膽なる血戦」に成功し「名譽と功業」を獲得できたとすれば事態は変つていたのかも知れない。しかし透谷自身が想定しているように「名譽と功業」の具体的形態である「権力」や「財産」(それらが現実的に軽視できない問題だったからこそ透谷の自己別決と実存を賭した闘いが始められたということ)はこれまでの考察で繰り返してきた)は相対的なものである。この次元では原理的に自己否定は完遂できない。これに対して「神」はその超越的絶対性によつて原理的に人間の自己否定を備えている。それは同時に「神」の被造物としての人間の絶対的自己肯定を備えているのである。

「大敗の餘成す所なき一糟粕」と自己規定しながら美那への恋慕の感情を抑封しえないことで苦悩する透谷の姿は「水平志向」においてはその自己否定が原理的に完遂しないことの具体的証明である。「神」との直面によつて原理的に自己否定を完遂する「垂直志向」が、被造

物としての自己を発見させることになる。透谷においてはそれが「大敗の餘成す所なき一糟粕」から「眞斬の石」「自然の形状」という自己規定になり、「我は敗軍の將なりと神は嘲り給ふまじ神は却つて我をあはれまん」さらに積極的に(1)の「今や余は全く神の子たるを信ず」という自己肯定になって現われるのである。

透谷における自己否定及び神の問題はこのように考えることができると思うのである。

*

(ロ)美那讚美及び恋愛観の問題

透谷は「名譽と功業を成さんと思ふ心」「此心を外にせば生の魂は無一物なり生の脳髓は死物にひとし」「發狂するか白痴になるかの二にあらざるよりは此心に離れて安穩なる生活を過ごす事を得ざるべし」と書くが、ここに過度の修辭があるとはいへ当時の民権運動家たちの「名譽と功業」心に比べて特に異常というわけではない。この修辭は父快蔵の非職に伴う「大膽なる血戰」に失敗し「敗餘の一兵卒」として美那への「絶情」を決意することを書く文脈の中での修辭である。このとき「驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し神に歸依す可きを發悟せり」というのだが、透谷が美那への恋慕の感情を抑封すべく自己に「絶情」を強いる状態での美那讚美の表現と「神に感謝し神に歸依す可きを發悟」した後の美那讚美の表現が異なるだろうことは容易に推測される。そのことを考察しよう。

透谷が自己に「絶情」を強いる状態での美那讚美は先ず(B)で「余は

凡夫の一疾病者なり嬢は眞神の庭に生長する葡萄の美果なり」「嬢は榮譽ある一婦人なり余は敗餘の一兵卒のみ」「此榮譽ある一貴女は深く余をラブするに似たり」「余は既に余が企てたる事業にして、成就す可き望みありと假定するを得ば、速に此愉快なるラブを受けてラウスの花を挿む可し、嗚呼是れ望む可からず」とあり、(C)でも「嬢は眞の神の教を以て衆生を救はんとする有要の一貴女なり生は實に大敗の餘成す所なき一糟粕のみ」「石坂嬢は教育も高く智識も持し加之其父より受けたる榮譽を荷へり」「生は始めより敗軍の將なる事を承知し居りたれば、是より世を輝かさんとする此一少女を誤らせんとは決して思はざりし」というように書かれる。先にも指摘した透谷の対句・重畳表現が典型的にみられるが、この対句・重畳表現は透谷の美那讚美に関わる心理を充分に示している。つまり透谷は美那への恋慕の感情を抑封するために「大敗の餘成す所なき一糟粕」たる自己の対極に美那を置く殊更の表現をしているのである。美那が「此社會は尊敬す可き社會にあらず財産を持ち名譽を負ふ人の如きは皆是れ土芥に比しき者なり名譽もなく財産もなき壯快の男子こそ我夫と定む可き者」と語りながら透谷を「ラブする舉動」を示し、勇氣を与えようとすればするほど「生の胸にハツシと立つ矢の痛みはいと堪え難く七轉八倒の苦しみ」をする透谷は美那を自己の対極に置いて己の胸奥に湧き出る恋慕の感情を抑封しようとするのである。

ところが「絶情」を決意した瞬間の「驚く可き洪水の如き勢力を以て神に感謝し神に歸依す可きを發悟」することで美那讚美の形少なく

とも位置づけが変る。例えば(C)で「嬢は詳に生の性質、意志、企圖を貫察して、生の爲めに神の貴きを知らしめたり」「實に恩人なる石坂嬢に深く感謝せざる可からず」「生は石坂嬢と別るるに當りて重要な誓言を約せり即ち人生の正路を取って進む可き事」「生を救ひたる援兵」「嬢は第二の大矢なり」と書き、(I)で「嗚々たるアンゼルの數語は全く余の頑心を解放したり、悉く驕傲の念を脱却せしめたり、茲に至つて世に盡くし民に致さんとするの誠情は悖然として旧に歸れり」というように透谷に「神」を教え、再生の契機を与えてくれた感謝すべき存在として美那を位置づけるのである。

前節で考察したように透谷の直面した「神」は自己否定を完遂する根柢の発見であり、「水平志向」による「大敗の餘成す所なき一糟粕」を相対化する「垂直志向」の発見即ち「自然の形状」として「我れは敗軍の將なりと神は嘲り給ふまじ神は却て我をあはれまん」そして「我身は神に捧ぐ可し、我心は神に従ふて及ばん限りは神を敬ひ尊ぶ可し」と自己肯定を可能にする根柢の発見であつたのだから、透谷の美那との恋愛の捉え方も變つてくるのは当然である。

(E)で「嗚呼余の *Deary life* を救ひくれしは *Dear* なり彼が爲めには畢生の力を以て其善を計らん」と書き(F)では「既に情は自然の力なりと認め得なば、余は寧ろ情の俘擒となり情の爲めに死罪に行はる、とも毫もいとふまじ、何となれば自然は神のたまものなればなり」、(I)では「嗚呼神の力なからん乎、半面の動物、何時の日か愈へん」、(J)で「嗟世に愛情より優なる者あらんや、嗟世に愛情より美なる者あ

らんや」「親の愛や、友の愛や、未だ以て眞の愛情と認むるに足らず」「眞に友を愛するは、計る所なきにあらずや、眞に子を愛するは思ふ所あるにあらずや」「然れども余は斷言し得ん、世の所謂愛情ナル者ハ生活的ノ思想ヲ離ル、ヲ得ル事稀ナリト」となっている。

美那との恋愛について直接言及して(D)の直前に書いた断片では次のように書く「小生は貴嬢と、最も親密なる交際を結ばん事かねてより、のそみ居りける所にてありし、然しながら *Mutual Love* に陥らんとは夢にだも思はざりし」「生はかねてより、吾が夫よ吾が婦よなどとおもしろそふに生活する男女の關係を冷笑する者なり、日本人の夫妻は實にあはれなる有様にて契れり、生は此の如き野暮な事はなすまじ」「今ま吾が慕ふ所の一貴女 (*You*)、若し吾が妻よ、我は夫よと云ふ日になれば、餘り風流でもないと考へ居けり」と。(D)では「*Dearest* 拜啓君も御承知の如く日本人のラブの仕方は、實に都合の能き(御手前主義) 訳に出来て居(れ)ります、彼等は情慾に由つてラブし情慾に由つて離る、者にしあれば、其手輕き事御手玉を取るが如し、吾等のラブは情慾以外に立てり、心を愛し望みを愛す、吾等は彼等情慾ラブよりも最ソツト強きラブ力をもてり、吾等は今尚ワンボディたらざるも、常にもはや一所にあるが如き思ひあり、吾等は世に恐るべき敵なきラブの堅城を築きたり、道義の眞理にも背かず、世間の俗風をも凌ぎ居る者なり、君よ請ふ生をラブせよ、生も此身のあらん限りは君をラブす可し、既に君をラブして、後にはワンボディとなるべき望あらば、共に相慰め相勵まざる可からず、我がおもしろき事

ある節は語りて心を療す可く君に感ずる所あらば落なく話し出で給はらん事拙の深く望む所なりかし」と書く。

ここにみられる恋愛観は当時の一般男女観が「情慾に由つてラブし情慾に由つて離る」というレベルにあつたことを思えば遙かに抜き出たものになつてゐるといわなければならぬ。このことは透谷が一貫して使う「ラブ」という用語に注目することで明らかになる。透谷は「世の所謂愛情ナル者ハ生活的ノ思考ヲ離ル、ヲ得ル事稀ナリ」として「吾等のラブは情慾以外に立てり、心を愛し望みを愛す、吾等は彼等情慾ラブよりも最ソツト強きラブ力をもてり」と「世の所謂愛情ナル者」との違いを強調するが、彼がここで「ラブ」を用いるのはその内容を従来の日本語で現わすことができなかったからだと考えられる。当時の一般的な認識における男女の恋愛を現わす用語は「色」「情」が主であり、やや進んだ内容を現わす用語が「愛」「恋」「交際」でしかもこの場合も動詞の語幹に止まるのが通例である。普通は人目を避けるべきものとしての前者が支配的であつた。「女学雑誌」は保守的な人々から批判を浴びながらも繰り返し女性の人格尊重、権利の伸張及び恋愛の尊重を主張してきた雑誌であるが、このころの記事で恋愛に関わるものを拾つてみると事態は明らかである。例えば「此書は甲田良造氏が一派の哲學を新工夫して從來の人々が公に述べ得ざりける色情を理屈に合はせて説明したものなり」「著者元來西國の志想に乏しく所云るラブなるもの、高尚清潔なる性質を知らず」（批評色情哲學）第六七号 一八八七・七・一六）或は「古來幾年と云ふ

限なく、男は尊くして女は卑し、女は只だ男子の方々に召使われて、其心の儘に取扱はるべきものと定りたる悪習」「娘嬢が親の命を聞いて他に嫁するの風俗等古よりの悪弊」を改めて「完全したる清潔の交際」を主張する記事（東京婦人矯風會主意書）第七〇号 同年八・六）さらには「例へば眞面目にて私は心限り君を愛すと云ひ或は肩を聳やかして君の爲に盡力せんなど述べる事あり日本人の眼に寫しては少しく恥かはしき程のものなり」（時事新報耶蘇教會女學校の教育法を評し再び外國人が設立する女學校の事に及ぶ）同）などは当時の恋愛観の一般的状況を示していよう。用語の問題に絡めて論じられるのはさらに後のことである。例えば「更に一事の感服する所及び承知しがたき所を擧れば、訳者がラブ（恋愛）の情を最とも清く正しく訳出し、此の不潔の連アッセンション感に富める日本通俗の文字を甚だ潔きよく使用せられたるの手ぎはにあり」「日本の男子が女性に恋愛するはホンノ皮肉の外にて、深く魂（ソウル）より愛するなどの事なく、随つてかゝる文字を最も嚴肅に使用したる遺伝少なし」（批評谷間の姫百合）第二三四号 一八九〇・一〇・一〇）或は「俗に之を男女の情愛と云ふ。この心情に二様あり。英語に一を「ラブ」と云ひ一を「ラスト」と云ふ。「ラブ」は高尚なる感情にして「ラスト」は劣等の情慾なり。邦語には確然たる区別なし。余は一を愛情と云ひ一を色情と名づけいさ、か其異同を辨せんとす」（色情愛情辨）第二五四号 一八九一・二・二八）さらに民友社の蘇峰が「人は二人の主事に事ふる能わず、戀愛の情を遂げんと欲せば功名の志を擲たざる

可らず、功名の志を達せんと欲せば戀愛の情を擲たざる可らず」と戀愛を否定した(「非戀愛」『國民三友』第一二五号 一八九一・七)のに対して「戀愛は神聖なるもの也」「今日は寧ろ大ひに男女交際を獎勵せざる可らず」と反論している記事(「非戀愛を非とす」第二七六号 一八九一・八・一)などがそれである。

透谷の戀愛觀が精神性に偏つたものになつてゐることについてはヤマが提示した「難題」と「名譽と功業を成さんとする心」即ち「水平志向」の反動とみることもできるが、「大敗の餘成す所なき一糟粕」たる自分を「救ひたる援兵」「財産を持ち名譽を負ふ人の如きは皆是れ土芥に比しき者なり名譽もなく財産もなき壯快の男子こそ我夫と定む可き者」と語る美那との間で成立する戀愛觀として評価すべき内容であろう。透谷のこの戀愛觀は例えは一八八九年二月の『楚囚之詩』を生む土台になり或は一八九〇年一月の「當世文學の潮模様」をはじめ特に「戀愛豈單純なる思慕ならんや、想世界と實世界との争戦より想世界の敗將をして立籠らしむる牙城となるは既に戀愛なり」として「戀愛は人世の秘鑰なり、戀愛ありて後人世あり、戀愛を抜き去りたらむには人生何の色味かあらむ」という一八九二年二月の「歴世詩家と女性」などを貫く原型になつてゐるのである。

ところで書かれた時と状況は違ふが同じキリスト教の「神」に直面することで回心を実現し透谷の(D)と似たような書簡を書いた人に植村正久がいる。透谷が十八歳の無職漢であり小説家を志望しながら政治小説の文学性を疑わざるをえない状況で揺れていたのに対し、植村は

その書簡を書いた時既に二四歳、下谷一致教会の牧師に就任するとともに小崎弘道や田村直臣らと東京基督教青年会を組織さらに『六合雜誌』を刊行するなど明確に立場を確立した人物であつたとの違ひはあるが、植村の婚約者山内季野(二一歳。フェリス女学校でキリスト教に触れて受洗し既に母校の教壇に立つ女性だが、結婚準備のために紀伊に帰省していた)に宛てた一八八一年四月二七日の書簡と比較してみよう。⁽¹⁶⁾

植村は「窓下ニ椅子遥カニ君ヲ懷フノ際 忽チ惠書ヲ得テ感喜極リナク之ヲ拝讀スルニ句々皆千金 時ノ移ルヲ知ラズ 何ゾ君ガ愛情ノ切ナルニ斯ニ至ル乎 予會テ宋ノ東破居士ガ亡妻王氏ヲ弔スルノ文ヲ讀ンテ慨然トシテ自ラ意ヘラク 男子妻ヲ娶ラバ王氏ノ如キモノニ非ザレバ不可ナリト 今王氏ノ上ニ駕スル佳人茲ニ在リ 亦何ヲカ憂ヘン 蓋特ニ肉身ノ樂ヲ目的トシ情慾ヲ縱ママニセンガ為ニ夫トナリ妻トナルモノ滔々タル天下比々是ナリ 貴論ノ如ク余輩基督ノ徒ハ即チ然ラズ 始祖未ダ沈淪セザル時ノ愛ヲ以テ相愛セント欲スルナリ基督ノ愛源ニ本キ身心ノ合體ヲ企圖ニ樂ンテ淫セザルノ愛ヲ全フセンコトヲ求ムルナリ」「余輩ハ上帝ノ保布ニ依リ率先シテ此汚穢天地ノ日本國ニ良模範ヲ立テザル可ラズ 信徒ノ任モ重イ哉 且吾國古ヨリ名媛才女ニ乏シカラズ 現ニ都下ニ於テ才學ヲ以テ顯ハル、モノ亦少ナキニアラネドモ如何ンセン其才學ハ餘リアルモ其心術志操ニ至リテハ取ル可キ所ナク 徒ラニ權官貴紳ノ囑託ヲ受ケ筆硯ヲ弄スル而已亦陋ナラズヤ 予ガ君ヲ慕フヤ才學ノ爲ノミニ非ズ 首トシテ敬虔氣節

ノ重ズ可キモノアルガ爲ナリ」云々と書く。傍線部分を見て両者が近似していることは明瞭である。勿論植村の書簡は透谷のそれに比較して落ち着いた表現になっているし、透谷が「我がおもしろき事ある節は語りて心を療す可く君に感ずる所あらば落なく話し出で給はらん事拙の深く望む所」と書くことを植村は季野との間で既に実践し、ここでも季野が「感ずる所」を和歌に託して送つて来る書簡に返事を書いているのだから透谷と美那の関係よりも進んでいる。先に透谷の書簡に比べて植村のそれが落ち着いた表現になっているとの指摘をしたが、わたくしは両者の違いに透谷の恋愛観の看過できない問題がとり出せるように思う。

植村は季野との婚約を喜び季野を讚美しながら繰り返し自分の使命を書く。例えばこの書簡でも「予ハ前書ニ言ヘル如ク福音ノ廣播ト有益ナル文事著述ニ力ヲ盡シ邦人ノウチニ智徳合和ノ好結果ヲ獲ンコトヲ冀望シテ止マズ」と書いて季野に自分の良き理解者であつて欲しいと訴えている。さらに季野の和歌を繰り返し求めてそれを丁寧批評し励ましを与えることを忘れない。一八七九年八月三〇日や一八八〇年二月のものと同推測される書簡など好例であるが、それらを見ると季野を尊敬しつつ巧みに忍耐強く季野を導いていることに気づくのである。透谷の書簡に比較して植村のそれが落ち着いた表現になっていることが単に文章表現に留まらず、その恋愛の態度の違いであることを思わざるをえない。透谷の文体が鋭い自己剔抉の痛みと吹き上げる情念を精神的闘いとして表現するものであることは疑えないが、それゆえ

に逆に美那とその関係者の状況が見えなくなっている様相がある。植村が予想を越えて結婚が延期になる事態を冷静に受け止めて寧ろ季野に家族への慰めを与えるべきことを勧めるのに対し、少くともとりあげた書簡類にみる透谷は美那との恋愛が進行することに益々反対の意志を強くするヤマへの配慮を示していない。或はヤマと闘うことを余儀なくされる美那を励まし導くことをしていない。

透谷は恋愛における精神性と自立した価値を発見して当時の一般的男女観を遙かに越える恋愛観を獲得しているのだが、その精神性に反逆されて、「厭世詩家と女性」を書くことになるというアイロニーを書簡類の表現の中に見出すことができるように思われる。

(1) 拙論「透谷文学の原型」——「富士山遊びの記憶」をめぐって——「(二)文芸と批評」第4巻第6号 昭和51年7月) 参照。

(2) 拙論「透谷文学の形成期の問題(一)」——「中央学術雑誌」の逍遥・二葉亭の諸論との関連において——「(二)文芸と批評」第4巻第9号 昭和53年1月) 参照。

(3) 拙論「透谷文学の形成期の問題(二)」——「混雑紛擾」とその言語表象——「(キリスト教と文学) 創刊号 日本キリスト教文学会九州支部 昭和56年7月) で粗描したが、今回再考することとした。

(4) 平岡敏夫氏「ある属吏の運命——北村快蔵の非職と透谷——」『文学』第54巻3号 昭和61年3月)。

(5) 小沢勝美氏「北村美那の一生——透谷との出会いと苦闘——」

- (6) 『女学雑誌』第68号(明治20年7月23日)の「新報」欄に
 「横濱山手共立女學校に於ては去十四日夜和漢學卒業證書授與式及閉校式を行はる卒業生七名にして悉く邦語の演説若くは和文朗讀を爲されたり即ち松本伊佐子は上流婦人に告ぐるの文、石坂美那子は自由に張るに女子も亦責任ありとの演説」云々とあり、「編者も來會して傍聴したるが諸子の雄辨にはほと／＼感じ入りぬ只だ最少しく漢語を省れたらんにはと思へる憾もありたりしことなり」の感想が加えられている。
- (7) 色川大吉氏「開明型の生活思想——平野友輔」(『新編明治精神史』昭和48年10月 中央公論社刊 所収)。
- (8) 「平野友輔醫院開業広告」(村野家文書)に
 「広告
 東京大学医学部
 卒業医師平野
 右ハ今般長後村ニ於テ内科外科眼科診察候間此段廣告ス
 診療時間 午前六時ヨリ正午十二時マデ 午後回診ス 但シ急病ハ此限ニアラズ
- (9) 明治十九年第七月 羽根沢屋方」とある(『三多摩自由民権史料集 下巻』昭和54年3月 大和書房刊 所収)。
 明治21年2月18日の村野常右衛門宛窪田久米書簡に
 「○放菴先生(注 昌孝の号)ハ県会中僕毆打事件にて一時拘引之未發狂之模様にて色々手を尽し此頃漸ク全快相成候趣ニ御座候、御典医ハ平野君ニ御座候」とある(前掲『三多摩民権資料集 下巻』所収)。
- (10) 明治20年8月15日の村野常右衛門宛五十嵐文平書簡に
 「就テハ小林弁護費送金ノ義ハ依頼ニ候得共、兼てヨリ石坂昌孝殿ノ尽力ヲ以テ相償ヒ是アリ候趣キ、尚又同氏ニ御面会委細了承致シ決テ御心配無之旨、至急差支ルノ場合モ有之節ハ同氏及林副重諸事相斗被下候義故」云々とある。また、明治20年9月6日の五十嵐文平宛村野常右衛門書簡草稿には、「弁護費ノコト御回答被下了承致シ候得共、該費ハ予算外ニ日数相嵩ミ候分ノ費用石坂、林両氏ヨリ送金無之為メニ小林氏差支有之モノト推察仕候」と云々とあり、(前掲『三多摩自由民権史料集 下巻』所収)同じような書簡は多い。
- (11) 色川大吉氏「放浪のナシヨナリズム——石坂公歴——」(前掲『新編明治精神史』所収)。
- (12) 渡辺獎氏「石坂昌孝の生涯(その一)——自由民権運動の輝ける指導者——」(『多摩文化』第9号 昭和36年11月 多摩文化研究会)。

透谷文学形成期の問題（三）

- (13) 『多摩の百年 上 悲劇の群像』（昭和51年5月 朝日新聞社刊）。
- (14) 「透谷と『昆太利物語』」（『明治大正文学研究』昭和33年6月 後『北村透谷研究』昭和42年6月 有精堂刊に所収）
- (15) 植林滉二氏「北村透谷における発想の限界——儒学共同体の光芒——」（『近代文学試論』第12号 昭和49年2月）と「北村透谷における発想法の一景」（『近代文学試論』第14号 昭和50年10月）に同様の指摘がある。
- (16) 『植村全集 第八卷』（昭和9年1月 植村全集刊行會刊）。全集編者はこの書簡を一八八〇年の部分に収録しているが、「君ハ生ラガ發行スル六合雜誌テフモノヲ讀ミタルカ」云々とあるのだから不適當である。一八八一年の書簡として扱うことにした。

Problems of the Formative Years of Tokoku's Literary Works (3)

—A Study of His Letters, Part I—

Akira KUROKI

In August of 1887, after a blank of two years, Tokoku Kitamura wrote some letters to Mina Ishizaka and others. These letters reveal his struggle with despair and resignation regarding his love. This desperate struggle shows up in his failure in business and in his personality. But through this struggle he encountered God and experienced a resurrection in his life.

In these letters we can see his self-denial and self-affirmation. Through his encounter with God he moved from horizontal thinking, i.e. considering only this world and human society, to perpendicular thinking, seeing things in relation to God and the Eternal. This became the basis of his literary work and his criticism.

Key words; Tokoku's Letters; Mina Ishizaka; Self-denial; Self-affirmation; Encounter with God; a Horizontal thinking; Perpendicular thinking.